



今月のミニ展示コーナー 解説シート

【展示のテーマ】 縄文のまつりと動物たち

—新指定文化財 のうまんかみ こ 能満上小貝塚の土製品などから見た縄文時代の精神世界—
市内の遺跡から見つかった縄文の「まつり」や動物との関わりを示す資料から、縄文時代の精神世界を垣間見ます。

【能満上小貝塚の調査】能満上小貝塚は、市内能満字上小貝塚 1962-15 他にあります。民間運送会社が当地にトラックターミナルを建設することになったため、その対象地 5,735 m²を 1992 年に発掘調査し、その後 2 年間の整理作業を経て 1995 年に調査報告書が刊行されました。調査の結果、対象地全域に縄文時代中期後葉から晩期中葉にかけてのムラがあることがわかり、住居跡や土坑などの遺構、土器・石器・土製品などの遺物、小規模な貝塚や埋葬人骨も見つかりました。調査から既に 20 年以上が経過していますが、この遺跡から見つかった遺構や遺物が示す内容は豊富で、特に平成 26 年 12 月に市の指定文化財となったイノシシ形土製品をはじめとする土製品類は、「縄文のまつり」の姿を今日に残す貴重な資料として高く評価され、全国的に注目され続けています。

【住居跡内出土の祭祀関係の土製品】調査区西側の一画に位置する住居跡から、土偶 1・土版 1・円形土版 1・手燭形土製品 1 点とその床面上に置かれたままの状態で見つかりました。これらの周囲からは、焼土・炭化物・灰・焼けた獣骨も見つかることから、火を介在する「まつり」を建物内で行った直後の様子を示すものとして注目されています。

【手燭形土製品】この住居跡から見つかった 4 点の土製品のうち、「手燭形土製品」と呼ばれる資料は、無傷の完全な状態で出土し、その造形や出来栄は他に類を見ないほど洗練されています。赤彩顔料を細部に施す手法も相まって、縄文の匠の技術力の高さを今日に伝える貴重な資料です。手燭形土製品は、関東地方を中心に 100 例ほどが知られていますが、その用途など謎の多い遺物の一つです。「手燭」の名称の由来は、蠟燭を灯す燭台をイメージさせることにありますが、実際に火を灯すのに使われたかはまだ定かではありません。



【イノシシ形土製品】縄文時代には、動物を表現したとみられる土製品が全国で約 200 例知られています。ただその表現は抽象的で、動物の種類がわからないものも多くあります。表現対象がわかるものでは、イノシシ・イヌ・クマ・サル・トリ・カメ・ヘビ・海獣・昆虫・貝などがありますが、最も多いのはイノシシです。昨年市の指定文化財となった 2 点のイノシシ形土製品のうち成獣を表す 1 点は、大きな鼻部・背中の鬣・つま先立ちの脚部などイノシシの特徴を極めて写実的にとらえており、国の重要文化財に指定されている青森県弘前市十腰内 2 遺跡の資料に匹敵する表現力を備えています。またこの資料は、胴体と後脚 2 点が、3 軒の住居跡内から別々に出土し接合したもので、完全なかたちのものを意図的に壊す行為には「土偶」の扱いに通じるものがあり、イノシシに関わる「まつり」の在り方を示すものとして注目されます。もう 1 点は、縞模様の表現から幼獣の「瓜坊」とみられます。

【土坑内に埋納された土器】直径 1.7m、深さ 2.6m の土坑の中層から 5 点の土器が見つかりました。これらはその一部が意図的に壊され失われており、欠損部分は別の場所に捨てられたとみられます。また、穴の最上部には蓋をするように炭化物の層が見つっています。深い穴を埋め戻しながら順番に土器を収め、最後に何かを燃やす行為が行われたようです。土器の破壊と埋納、深い穴の埋め戻しという一連の「まつり」の姿が垣間見えます。



市の指定となった土製品



イノシシ形土製品



手燭形土製品



土坑内埋納土器